

Title	ソシオメトリー研究の発展と今日の諸問題(其の一) : モレノのソシオメトリーの背後にあるもの
Sub Title	The development of sociometry and its current problems (I) : the background of Moreno's sociometry
Author	佐野, 勝男(Sano, Katsuo) 関本, 昌秀(Sekimoto, Masahide)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1958
Jtitle	哲學 No.35 (1958. 11) ,p.509- 534
JaLC DOI	
Abstract	Sociometry is now defined, roughly speaking, in three different ways as follows. (1) Sociometry is an approach which aims at the operational definition of sociological concepts and accordingly all measurement of societal and interpersonal phenomena. (2) Sociometry is an approach to measure and estimate dynamic interrelations within and among groups and the structure of groups. It is often identified with sociometric test. (3) Sociometry is the direct study of groupal and structured dynamics through measurement, namely, a science which aims at clarifying the substance of interrelations within and among groups rather than measuring and estimating them. Moreno has put various definitions on sociometry as the occasion and circumstance may demand. In spite of the apparent variation of his definitions, his fundamental ideas on sociometry have been consistent from the start to the present time and his sociometric systems are still integrated rigidly in his own brains. We can, therefore, discuss his sociometry at least from the following four aspects when we consider it. (1) Philosophy of sociometry: (2) Fundamental concepts of sociometry: (3) Scientific methodology of sociometry: (4) Various techniques of sociometry: Moreno's sociometry is composed of the close connection of philosophy, science and therapy. Therefore many of his theories on human action are based both on empirical research findings and on theoretico-speculative imagination, and religious value judgements often enter into his theories.
Notes	IV 社会,慶應義塾創立百年記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000035-0514

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ソシオメトリー研究の発展と今日の諸問題(其の一)

(1)

——モレノのソシオメトリーの背後にあるもの——

佐 野 勝 男

関 本 昌 秀

一 ソシオメトリーとは何か

二 モレノのソシオメトリー

(一) ソシオメトリーの哲学

(二) ソシオメトリーの科学的方法論

(三) ソシオメトリーの基礎概念

(四) ソシオメトリーの諸技術⁽¹⁾

一 ソシオメトリーとは何か

今日、心理学、社会心理学、臨床心理学、社会学、教育学、さらに広くは、文化人類学、政治学などの領域において「ソシオメトリック・アプローチ」、「ソシオメトリー調査」、「ソシオメトリーの科学的測定」というような言葉がしばしば口にされるようになってきた。しかし、その言葉の使用法はその研究者達の間において必ずしも一致し

ていない。いまこころみに、手許にある社会学辞典⁽²⁾と心理学辞典⁽³⁾の二冊を取り出して、その中に見出される「ソシオメトリー」の項を眺めてみても、両者の定義の間にははっきりとした差異がうかがわれる。すなわち前者においては、ソシオメトリーとは、「社会学的諸概念の操作的定義ならびに人間関係及びその他の社会現象の量的あるいは計量的用語による記述を強調する社会学的研究の一研究法」であると定義されており、後者においては、「社会集団内の諸個人の力動的相互関係の研究を強調し、空間的あるいは地理学的類推法や説明法を大いに採用する、社会科学における一つの発展」であると定義されている。つまり後者では、ソシオメトリの意味を社会集団内における諸個人の相互的人間関係の研究に限定しているのに対し、前者では、それを単なる人間関係現象の研究だけにとどめず、さらに広く、社会現象一般の測定、ならびに、それにとまなう諸概念の操作的定義を行う研究と、広義に解釈している。かつて、ソシオメトリーに定義を与えてきた諸々の学者の中でも、社会学特に新実証主義的色彩の強いペイン⁽⁴⁾、ランドバーク⁽⁵⁾、チェーピン⁽⁶⁾などは、ソシオメトリーを広義に解釈している代表的な人々であり、一方、モレノおよびその流れを汲む弟子達、また、ズナニエツキ⁽⁷⁾、ギェールヴィツチ⁽⁸⁾、フォン・ヴィーゼ⁽⁹⁾などの社会学者は、それを狭義に解している代表的な人々である。

しかし、ソシオメトリーを狭義に解する人々の間にも、二つの異なる立場があるように思われる。その一つの立場は、集団構造または集団内の相互的人間関係を測定し評価することが、ソシオメトリの主要な任務であると考えた立場、云いかえるならば、sociometry すなわち socius-metrum の後半分 metrum に重点を置く測定的ソシオメトリスト (metrum sociometrist) の立場である。この立場に立つ多くの研究者がソシオメトリに対して与えている定義は、ブロンフェンブレンナーによってなされた、「ソシオメトリーとは、社会集団内に

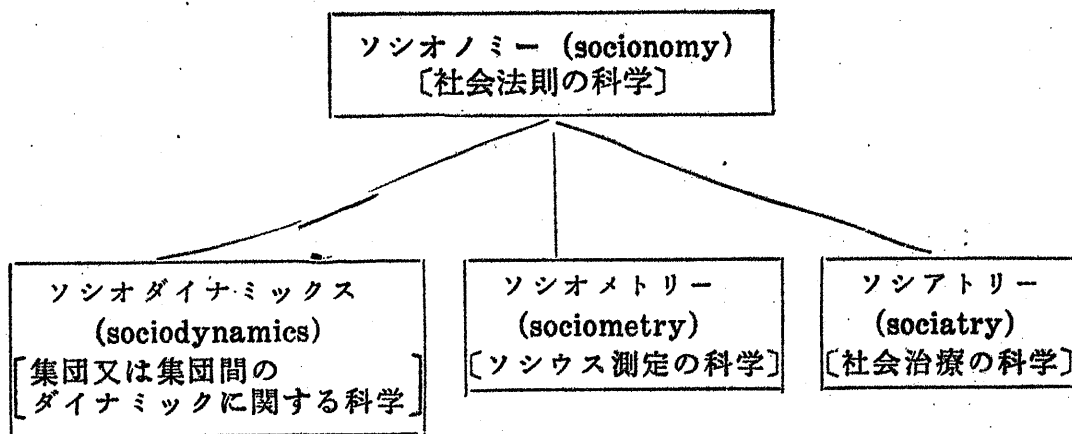
おける受容 (acceptance) あるいは拒否 (rejection) の拡がり測定することによって、社会的な地位、構造、発展を発見し、記述し、評価するための一つの方法である⁽¹⁰⁾ という定義によって最もよく代表されるであろう。要するに、この立場からすれば、ソシオメトリーとは、集団内の諸成員の間に取交される受容・拒否の選択の網の目を測定し、記述し、評価するための一つの調査技術にすぎず、その定義の表す意味は、モレノのいわゆるソシオメトリック・テストと同義のようになり狭められてしまっている。しかもこの立場は、今日、ソシオメトリー研究者の間で、最も一般的なものとなっているように思える。この立場が、このように多くの研究者達によって漠然と遵奉されているということには、それなりの理由があり、ソシオメトリー研究の発展過程をふりかえってみれば、むしろそれは当然の成行とも思われる。この点については後に節を改めて叙述する。

さて、ソシオメトリーを狭義に解するいま一つの立場は、測定それ自体よりも、むしろ、集団構造または集団内の人間関係現象の究明ということを強調する立場、云いかえるならば、sociometry すなわち socius-metrum の前半分 socius に重点を置く、ソシウス、ソシオメトリスト (socius sociometrist) の立場である。この立場からすれば、測定は集団内の人間関係現象を究明する単なる手段に過ぎない。勿論この立場においても、測定ということは欠くことのできぬ重要な要件である。しかし、それはあくまでもソシウスをより科学的な水準において研究するための一つの拠り所としての意義しかもたない。したがって、この立場においては、ソシオメトリーを前述のようにソシオメトリック・テストと同義に解したり、それだけを他から切り離して単一の独立的な調査技術として使用したりはしない。集団内の人間関係現象を究明するために有効と考えられるあらゆる測定技術（例えば、知己テスト、自発性テスト、状況テスト、役割演技テスト、ゲス・フリー・テスト等）はすべてソシオメトリ

—という用語の中に含められる。ときとしては、更にこの用語によって—モレノがよくやるように—心理劇、社会劇、自発性訓練などのような集団内の人間関係を治療、改善するための諸技術なども包括されてしまう場合がある。しかも、それらの諸技術は、それぞれが個々ばらばらな実証用具としてではなく、人間関係現象のより科学的、より実証的な探究とそれに基く法則の樹立ならびにその実践化という目標のもとに、相互に密接な関連をもたせられている。勿論、この立場にたつソシオメトリスト達も、決してソシオメトリック・テストの意義を軽視しているわけではない。それはあくまでソシオメトリの諸技術の中核をなす重要なテストであり、ソシオメトリの特質を最もよく反映している実証用具であることを彼等は充分承知している。ただ、彼等が前述のソシオメトリスト達と違う点は、人間の自発性や創造性の力を既成の制度や文化から解放しえた、あるいはまた、両者を円滑に調和しえた、より良き社会集団を確立しようとする実践的な目標に照して、ソシオメトリック・テストをつねに他の諸技術との関連においてあるいはそれらの諸技術の背景のもとに使用し、駆使していかうとつねに努力を払っている点である。他方、この種の立場では、これらの諸技術を相互に関連させる接着剤として、モレノの基本的理論考想とその科学的方法論が大いに強調されている。

- (1) 紙数制限のため、「三 ソシオメトリのその後の発展」及び「四 ソシオメトリの今日の諸問題」の節は「ソシオメトリ研究の発展と今日の諸問題(其の二)」(哲学第三十輯(次号)に発表予定)に回すことにした。
- (2) Fairchild, H. P. (Ed.) Dictionary of sociology: and related sciences. 1955.
- (3) Dreyer, J. A dictionary of psychology. 1952.
- (4) Bain, R. Sociometry and social measurement. Sociometry, 1943, 6, p. 212.
- (5) Lundberg, G. A Discussion of sociometry. Sociometry. 1943, 6, p. 219.

第一図 モレノのソシオメトリーの体系



「人民のための、人民による、人民の社会学」⁽⁵⁾であるというように、きわめて漠然とした思弁的な定義を与えてみたりしている。

モレノにみられるかような曖昧な態度は、彼の主著「誰が生き残るか」の初版と再版の両著にうかがえるソシオメトリー体系の相違に更に著しく露呈されている。初版においては、第一図に整理した如く、彼はソシオメトリー体系の総括的頂点に社会法則の科学としてのソシオノミー (socionomy) なるものを考え、更にその中に漠然と二つのサブシステムを考えていた。すなわち、(一) 社会集合体 (social aggregates)、単一集団 (single group) ならびに集団群 (group cluster) の構造およびその力動性^{ダイナミックス}に関する科学としてのソシオダイナミックス (sociodynamics) (これはレヴィン一派のグループダイナミックスの領域と同一または重複するものと考えてよい) (二) ソシウス測定^{ソシウス測定}の科学、換言すれば、ソシオメトリック・テストを基礎として体系的に組立てられた社会測定の科学 (それは社会現象の測定そのものを目的とした量的社会学ではなく、量化されたソシウスを研究する科学である) としてのソシオメトリー (sociometry) (三) 社会治療の科学、すなわち集団の非組織化ならびに集団内の個人の不適応を治療し調整することを目的とした実践科学としてのソシアトリー (sociatry) の三つのシステムがそれである。この観点か

らすれば、ソシオメトリーはあきらかに社会集団内の人間関係あるいは集団間の相互関係を取扱う総合的な体系ではなく、それ自体ソシオノミーというより大きな体系内の一つのサブシステムに過ぎない。事実、モレノ自身もその初版の中で「集団諸成員の心理的特性の数学的研究、すなわち、量化的方法からなる実験技術および量化的方法の適用によって得られた諸結果を取扱うところのソ、シ、オ、ノ、ミ、ーの、一、部、門、が、ソ、シ、オ、メ、ト、リ、ー、と、呼、ば、れ、る、⁽⁶⁾」と⁽⁶⁾いつている。ところが、その後、モレノならびに彼の協力者達によって数々のソシオメトリーの研究（ソシオダイナミックスに関する研究、ソシアトリーに関する研究も含めて）がつぎつぎと発表され、この種の研究が各方面で盛になるにつれて、「ソシオメトリー」という言葉は次第に曖昧となり、一方では非常に狭められてソシオメトリック・テストと同義に用いられてみたり、他方では広くソシオノミーと同義に解されてみたりするようになった。この両者の区別はモレノ自身においてすら次第に不明瞭となり、意識的にまた無意識的に、「ソシオノミー」という言葉が「ソシオメトリー」とか「ソシオメトリック・ムーブメント(sociometric movement)」とかいう言葉によってしばしば置き換えられるようになった。「誰が生き残るか」の再版においても、「ソシオノミー」という言葉はすっかり姿を消してしまい、逆に、「ソシオメトリー」という言葉が「ソシオノミー」という言葉にとつて代って、前述の三部門を包括する概念のように叙述されており、⁽⁷⁾その定義をみても、初版にみられた「ソ、シ、オ、ノ、ミ、ーの、一、部、門、で、あ、る、⁽⁸⁾」という一句がいつのまにか削除されてしまっている。⁽⁸⁾

以上の如く、ソシオメトリーの元祖であるモレノ自身が「ソシオメトリー」という言葉に厳密な定義を下すことなく、時と場所にに応じてその言葉にいろいろな響をもたせ、これを曖昧に使用していたのは、彼がソシオメトリーの考想（換言すればソシオメトリーの全体系）をどうにかして社会科学の領域における流行の波に乗せよう

と夢中であつたことに一部帰因するように思える。すなわち、前世紀の末葉から今世紀の初頭にかけては、社会科学の領域においてもぼつぼつ計量的方法を重視した研究が頭を出しはじめ、後の新実証主義や人間生態学やソシオメトリの出現の礎が着々とつくられつつあつた。しかし、今世紀初頭二十五年間にみられた社会現象の測定のほとんどは人口学的性格を帯びたものであり、いわゆる *demometry* (*demo*=*people* *metrum*=*measurement*) と称せられる種類のものではあつた。こんな時期に、モレノによってソシオメトリの考想が創唱され、集團の實際の構造を直接研究し測定することができるといふ可能性が明示された。ソシウスを測定する測定用具の発達は当時の社会科学者の多くが真に熱望していたことであつたので、ソシオメトリの出現はたちまち数量的研究方法に関心をもつ多くの社会科学者の注目を浴び、ソシオメトリという言葉は一躍流行語となつていった。かように、ソシオノミーの一つのサブシステムに過ぎないソシオメトリが異常な注目と期待を集めたのに反し、ソシオノミーとかソシオダイナミックスとかソシアトリーという他の部門の名称はソシオメトリという言葉の流行の前に影を潜めてしまい、同じように、ソシオメトリの理論的背景もなおざりにされ、彼のソシオノミーの体系などは全く無視されてしまった。そこで、モレノは再びソシオノミーの体系を強調し、ソシオメトリの背後にある理論的考想や他の諸部門との関係を一般に再認識させようと努力を払つた。その際彼は、「ソシオメトリ」といふ言葉のもつ流行性を意識的に利用し、「ソシオノミー」といふ言葉の代りに「ソシオメトリ」とか「ソシオメトリック・ムーヴメント」といふ言葉を敢えて用いたのではないかとも思われる。

このように、モレノ自身においてすら「ソシオメトリ」といふ言葉の使用法は極めて粗雑であり曖昧であつて、その言葉の表す意味は時と場所においてさまざまな響をもつていた。しかしこの事実も、「アクション・メソッド

の観点からすれば、定義の論理的純粹さを必要以上に強調することは、恐らく全然益のないことであろうし、また、過度に発達した論理体系は、アクション・プラクティスを阻止し遲滞させる擬似的な安定性と科学的安寧をもたらずであろう⁽⁹⁾というモレノの考えに立てば、なんら責められるべきことではなく、また、基礎的発達の途上にある若い科学としてはある程度やむを得ないことであつたのかも知れない。

以上に述べた如く、モレノにおいても、「ソシオメトリー」という言葉はみかけ上可成り曖昧に使用されてはいたが、この事実によつて、直ちにモレノのソシオメトリーの考想それ自体が曖昧であると断定することは性急である。確かに、モレノが場所々々・時々において「ソシオメトリー」という言葉に与えてきた定義は違つていたかも知れない。しかし、彼のソシオメトリーの考想それ自体は終始一貫して變らず、第一図に示されたようなソシオメトリーの体系は今日もなお彼によつて固執されている⁽¹⁰⁾。従つて、われわれがモレノのいわんとするソシオメトリーとは何かと尋ねられた場合、彼がさまざまな著述の中で与えている定義の一つを断片的に抜き出し、それだけに基いて安直に答えを出してしまうことはきわめて危険である。それよりもまず、モレノの考想なり理論的背景なりを充分検討したうえで、もう一度改めて彼が与えたさまざまな定義を考えなおしてみることが先決のように思われる。

- (1) Moreno, J.L. Sociometry, experimental method and the science of society: An approach to a new political orientation. 1951, pp. 8-9.
- (2) Moreno, J.L. Sociometry in relation to other social sciences. *Sociometry*, 1937, 1, p. 208. also, *Sociometry, experimental method and the science of society*, 1951, p. 17.
- (3) Moreno, J.L. *ibid.* (1951), p. 8.

- (4) Moreno, J.L. Who shall survive? (revised), 1953, p. lxxix
- (5) Moreno, J.L. The sociometric school and the science of man. *Sociometry*, 1955, 18, p. 271. Contributions of sociometry to research methodology in sociology. *Amer. Soc. Rev.* 1947, 12, p. 288. also, *Foundations of sociometry*, *Sociometry*, 1941, 4, p. 21.
- (6) Moreno, J.L. Who shall survive? A new approach to the problem of human interrelations. 1934, p. 10.
- (7) Moreno, J.L. Who shall survive? (revised), 1953, pp. 48~59
- (8) Moreno, J.L. *ibid.* p. 15 & p. 51.
- (9) Moreno, J.L. Sociometry, experimental method and the science of society. 1951, p. 7.
- (10) Moreno, J.L. The first note on the sociometric system. *Sociometry*, 1955, 18, pp. 88~89.

二 モレノのソシオメトリー

モレノの頭にえがかれたソシオメトリーは、今日多くの人々によって考えられているように、人間関係や集団構造を科学的数量的に測定するための単なる調査技術に終るものでもなく、また、集団の非組織化ならびに集団内の個人の不適応を治療し調整するための治療技術に終るものでもない。勿論、それらの諸技術は彼のソシオメトリーの重要な側面であることはいうまでもない。しかし、彼にとって更に重要なのは、それらの諸技術を生み出す源泉となり、それらを相互に結びつけるコンクリートとなっているソシオメトリーの哲学ならびにソシオメトリーの科学方法論、つまり、ソシオメトリーの理論的側面である。かつてモレノは「ソシオメトリーの現代の傾向」と題する論文の中で、「ソシオメトリーの技術、操作、そして方法の急速な融合に平行して、その理論が

顧みられず無視されてきたことが、ソシオメトリの発展における障害の一つとなってきた。このことは有意義な仮説の構成にとってだけでなく、技術それ自体の精練化にとっても不幸なことであることが解った。……………

この事実はいずれにも一つの理由によって不幸なことといえる。私が紹介した理論や概念はただ有意義な仮説の構成に重要な手掛りを与えるだけでなく、技術の適切な使用にとっても、生産的な実験の設定のためにも重要な必要条件である。特に若い科学の初期の時代においては、理論から技術をうまく分離することはできない⁽¹⁾と述べているように、モレノのソシオメトリは、ソシオメトリック・テストやソシオグラムや役割演技や心理劇や社会劇等々の諸技術の単なる総和につきてしまうものでなく、自発性 (spontaneity)、創造性 (creativity)、テレ (tele)、社会的アトム (social atom)、心理社会的網状組織^{ネットワークス} (psychosocial networks)、現実場面における行動 (action in situ)、自発性の高揚 (warming up) 等々の理論的要素がその中において重要な位置を占めている。従って、われわれがモレノのソシオメトリの全貌を概括的に再検討しようとする場合、少くとも、(一)ソシオメトリの哲学(強いて云えば宗教)(二)ソシオメトリの基礎概念(三)ソシオメトリの科学的方法論(四)ソシオメトリの諸技術の四つの側面からみなければいけない。以下、これらの諸側面を極く簡潔的に検討してみよう。

(一) Moreno, J.L. Current trend in sociometry. *Sociometry*, 1952, 15, pp. 148~149.

(一) ソシオメトリの哲学

メイヤーが、「ソシオメトリは、人間のもつ自発力と創造力への深厚な信念と、制度や文化の束縛からかような力を解放しようとする欲求とから湧き出た暮ら⁽¹⁾の哲学である」と称したように、モレノのソシオメトリは

彼の哲学的信念と社会改造への情熱が産み出した一つの学問体系であるといってもよい。モレノによれば、現代の社会は制度や技術の高度の発達と宗教心の稀薄化という二つの避け難い現象に直面し、きわめて不安定な状態に置かれている。現代人は宗教という強堅な防壁の中から逐い出され、自分達が創り出した機械文明の波に吞まれて、いまや完全に人間性を喪失してしまっている。このような不安定な社会状態から人類を救い出し、より健全な社会を建設するにはどうしたらよいか。この目標の達成を宗教に頼ることは最早好ましいことではない。それはなにか宗教体制に代るべき強堅な体制の助けを借りて達成されねばならない。モレノはその体制こそ科学にほかならないと考え、科学の助けを借りてよりよき社会を建設しようと熱望した。では、彼が理想とした現代におけるよりよき社会とはどんな社会であつたらうか。一言で云ってしまえば、それは、「知能、人種、信条、宗教、イデオロギー」の立場がどうであろうと、すべての個人が、生存するためにまた自発性と創造性を有効に用いるために、平等な機会が与えられている社会⁽²⁾であり、具体的には、文化や制度によって規制される外的周辺的な社会構造が、諸個人の自発性に基いて形成される内的中核的な人間関係の類型^(タイプ)に矛盾なく適合されている社会である。モレノは、人間社会の構造の中核となるものはその構造内のすべての個人が自発的に形成する諸関係であつて、経済的、文化的、技術的などの諸過程から生ずる諸関係は、周辺からこの中核的構造に影響を及ぼしているに過ぎないと考えている。彼によれば、これらの諸過程の一つ二つを欠きながらも機能している社会は考えられるが、個人それ自体および個人間の自発的諸関係を欠きながら機能している社会は考えられないのである⁽³⁾。勿論、この中核的社会構造を外的諸過程によって規制される諸関係から全く切り離してしまうことが出来るとは彼も考えていなかった。寧ろ彼は、現実の集団においては両者の諸関係は一緒になつて一つの構造をなしており、

この周辺の諸關係が中核的な自発的人間關係にいかん影響を与え、またいかに統合されていくかは、ソシオメトリーが研究せねばならぬ重要な問題の一つであるとさへ述べている。要するに、彼のいわんとする心のうちは、社会構造の中核をなすものは人間の自発性に基いて形成されるインフォーマルな諸關係であつて、この基礎的關係が外的周辺のフォーマルな諸關係と円滑に調和している社会が最も能率的な社会であり、同時に、その社会に所屬する諸個人のパーソナリティを思う存分に發達させてくれる理想的な社会であつて、このような社会は適者生存の原則に従い末長く存続してゆく。これに反して、両者の構造が余りにも掛離れてしまい、前者の基礎的構造が後者の外的構造に圧倒され埋れてしまっている社会は、社会的緊張と軋轢とを内臓する非能率的社会であり、いずれは淘汰されてゆく運命にある社会であるということである。

モレノはかかる哲学的宗教的前提に対し確固たる信念と絶大なる自信とをもち、科学の助けを借りてこのよりよき自由社会を建設しようと試みた。かかる理想社会に到達するための科学的指導原理として考案されたのが、いわゆる彼のソシオメトリーなのである。従つて、彼のソシオメトリーは元來実践科学としての要素を多分に含むものであり、その本来の使命は、いかなる人間社会にも現存するインフォーマルな基礎的社会構造を發見し、且つ、その社会の外的構造をこのインフォーマルな内的構造に適合するよう再構成し、かくて最高の理想に近い社会生活を営めるように諸個人の自発性を解放してやることにあつたのである。通常、ソシオメトリーの技術と考えられている諸技術は、いわばこの理想社会實現への諸道具なのである。彼があの大なる主著に「誰が生き残るか」などという奇妙な表題をつけたのも、以上の如く、ダーウインの自然科学的生物学的要因に基づく動物の生存理論に対し、社会的要因に基づく社会（あるは集團）の生存理論を展開しようとする彼の野心によるものである。

- (1) Meyer, H.J. The sociometry of Dr. Moreno. *Sociometry*, 1952, 15, p. 355.
- (2) Moreno, J.L. The sociometric school and the science of man *Sociometry*, 1955, 18, p. 19.
- (3) Moreno, J.L. The foundations of sociometry. *Sociometry*, 1941, 4, p. 18, also, *Sociometry, experimental, method and the science of society*, 1951, p. 139.

(二) ソシオメトリの基礎概念

モレノのソシオメトリは前述のような哲学的宗教的前提から出発しており、しかも、彼はこの哲学的宗教的思想が科学的探究へのインスピレーションとして重要な役割を果すものと強く信じていた。従って、彼のソシオメトリの理論や基礎概念はきわめて哲学的宗教的臭の強いものであり、これを充分に理解するためには、彼の哲学や宗教観の更に深い部分の検討を必要とするだろうし、その紹介には、「誰が生き残るか」の改訂版にみられるような莫大な頁を裂かねばならぬだろう。しかし此処では、本論の主旨にそう程度にごく簡単に触れておくことにしよう。

(1) テレ モレノは、あらゆる人間集団は、皮相的形式的構造の下に、それよりも遙かに現実的であり力動的である基礎的非形式的構造を備えており、且つ、その構造は集団諸成員の自発性に基く感情的関係、換言すれば、諸個人の牽引、反撥の選択過程によって構成されていると考え、この基礎的深層的構造についての理論化とその測定に力を注いだ。先ず彼は、観察的事実から諸個人の選択関係が全く偶然に且つ均等に生起するものでなく、何らかの要因に影響され様々な形を呈して生起していることを発見し、その要因をテレなる概念をもって表した。つまり、テレとは諸個人の間に作用する感情の流れ (flow of feeling) であり、人々が互に関係し合う様式を規

制する重要な要因である。そしてそれはあらゆる集団の中核的なインフォーマルな構造に実在性を与える最も基礎的な現象である。それは広い意味では、牽引、反撥と解することもできるが、厳密には、寧ろその奥にあってこの牽引、反撥の強さと方向を規制する力と考えられる。

テレには次に列举するような種類と性質がみとめられる。(a) テレにはプラスのテレ、すなわち牽引的選択をなさしめるテレと、マイナスのテレ、すなわち反撥的選択をなさしめるテレとの二種がある。また、(b) 或る個人から相手に向って流れ出てゆくテレ、すなわち投射的テレ (projective tele) と、相手方からその個人に戻ってくるテレ、すなわち返送的テレ (retrojective tele) の二種がある。更にまた、(c) 個人間に意欲的に選択を取交させる原因となる動能的テレ (conative tele) と相手方から与えられる選択の認知を可能ならしめる認知的テレ (cognitive tele) の二種が分けられる⁽¹⁾。(d) テレはその活動場面によって変ってくる。すなわち、教室の場面において或る学生のもつテレは遊びの場面においてもつテレとは異っている。モレノやその直系の弟子達が、ソシオメトリー調査において、選択基準の分化をやかましく云うのはこのためである。(e) テレの分化に伴って集団の基礎構造も分化してくる。例えば、ジェニングスは、私的個性的基準に照してもつ心理的テレ (psychic tele) と集団的目的追求的基準に照してもつ社会的テレ (social tele) とを分け、このテレの違いによって集団構造も変ってくることを検証した⁽²⁾。すなわち、心理的テレによって構成される心理集団 (psychic-group) と、社会的テレによって構成される社会集団 (social-group) の二つの異った集団構成が考えられる。(f) テレはそれぞれ強度が異なる。それ故に実際の調査手続において選択の強さを測定するためのいろいろな工夫がなされている。(g) テレは時間とともに或る程度変化する。ソシオメトリー調査における信頼性を科学的に保証することの難かしさ

は、一部はこの点に帰因する。(h) テレは人に対してのみ流れるものでなく、事物やシンボルに対しても同様に流れる。(i) テレは強直な伝統的社会秩序をもつ社会においてはあまり作用せず、比較的自由自在の人間関係がみられるような社会において大いに作用する。つまり人間の自発性や創造性はテレ過程を通して自身の姿を社会的に表出するものと考えられる。

(2) 社会的アトム 集団内のすべての個人は、自分を取巻く他の成員に対して投射するテレとそれらの諸成員から彼に投射されるテレとによって作られるテレ関係の核をもっている。この核が社会的アトムと呼ばれる。具体的には、社会的アトムは個人の周りに作られる牽引、反撥の型と考えてよい。この社会的アトムには二つの側面が考えられる。一つは、ある特定の個人の他者との結合関係を表す心理的側面であり、一つは、人間社会の構造の最小単位としての意味をもつ集団的側面である。前者の側面に観察の目を向ければ、特定の個人についての診断が可能となる。すなわち、彼の社会的アトムがいかなる型をとっているか。そして、社会的アトムの型と心理学的社会的諸変数との関係に関する研究結果に照して、彼が現在示している社会的アトムの型が望ましいものがあるか或は他の型に変えるよう治療改善してやらなければならないものであるかを診断することができる。一方、後者の側面に観察の目を向ければ、その社会（或は集団）ではいかなるタイプの社会的アトムが多くみられるかを、また、社会的アトム相互の結び付きの様子、すなわち社会的アトムの網状組織の型を知ることによって集団それ自体の診断がなしうる。社会的アトムはテレのもつ性格に関連して、場面による分化、時間的变化等の性質を備えている。

モレノの理論体系の中には、社会的アトムと類似した概念で文化的アトム(cultural atom)と呼ばれるものが

ある。これは特定の個人のその社会における役割関係の型を表す概念であり、その型は文化的に規制されている。すなわち、社会的アトムが結合の基準、換言すれば、選択の基準によって様々な型をとると同様に、文化的アトムはその社会に広くゆきわたっている文化ならびに規範的社会秩序の相違によって様々な型を呈する。しかし、社会的アトムと文化的アトムは以上の如く理論的には分けられるが、現実の場面では一つのアトムとして作用しており、両者の区別は意味がなくなる。つまり、われわれが現実の集団の中に見るアトムは、社会的アトムに文化的アトムが統合された形でのアトムなのである。この社会的アトムと文化的アトムとの不調和は社会的アトムの不均衡(投射的テレと返送的テレの不一致)と同様に個人の *personality disorder* をもたらし、遂には *social disorder* をも惹起する。従って、両アトムならびにそれらの相互関係を理解し、これを改善する方法を発見することは、人間関係の精神病理学上きわめて重要なことである。

(3) 心理・社会的網状組織 テレ関係を示す核としての社会的アトムのいくつかが相互に結びついて一層社会的性格を帯びた分子を構成し、更にこの分子が次ぎ次ぎと結びついて一つの社会または集団におけるソシオメトリ^①的關係組織を構成する。この組織が心理・社会的網状組織と呼ばれる。この組織はきわめて力動的な存在であり、社会または集団において様々な力動的機能^②を果していることが、モレノによって行われた流言の伝播経路の実験等によって実証されている^③。また、この心理・社会的網状組織は、拡がりの範囲、密度、強度等の違いからいろいろな型が考えられ、その型の相違によって社会または集団の類型化(*typology*)が可能となり、集団の発達や衰頹の度合を示すことができる。心理・社会的網状組織の類型化とその機能とに関する研究はいまだ充分に発達を遂げていないが、いずれはこの方向の研究にソシオメトリストの努力が多く払われるようになるだろう。

以上、モレノによって考案されたソシオメトリの基礎概念の中、重要なものをごく簡単に紹介してきた。これら諸概念に関連して、最後に一言、モレノにおいては、人間の自発性と創造性はテレの過程を通して社会的にその姿を表し、このテレの自発的表出によって形成された構造が社会の最も基礎的な構造であり、且つそれは、後に述べるようなソシオメトリの手續や社会学的心理学的種々の作図技術（例えばソシオグラムやロールダイアグラム）や心理劇的または社会劇的治療技術等の適用によってはっきりとその形を示し得ると考えられていたということをおきたい。勿論モレノも、現実にもみられる社会構造が決して純粹に基礎構造（すなわちソシオメトリ的構造）の形をとったり、或は逆に、純粹に外的構造の形をとったりすることができるとは考えておらず、寧ろ、現実の社会構造は両者の構造が力動的に統一され、相互に入雜った形で存在していることをはっきりと認めている。⁽⁵⁾ それにも拘らず、或る社会にもみられる現実的構造はきわめて外的制度的構造に近いものであったり、また他の社会にもみられるそれは非常にソシオメトリ的構造に近いものであったりしている。先にも述べたように、モレノのソシオメトリは、人間の本性である自発性が充分に表出され得る社会構造を備えた社会つまり、ソシオメトリ的構造に近い構造をもつ社会が人類の理想社会であり、ソシオメトリはこのような理想社会を建設するための科学的指導原理であるという哲学的宗教的前提から出発しているので、現実の社会構造がソシオメトリ的中核構造に近似するよう形成されてゆくことは何よりも大切なことであつた。彼のソシオメトリにおいて、ソシオメトリ的基礎構造と外的構造との調和の問題がつねにその中心問題となつてゐるのはこの理由によつてゐるのである。

(1) Moreno, J.L. Sociometry in action Sociometry, 1942, 5, p. 298-315

- (2) Jennings, H.H. Leadership and isolation. 1943.
- (3) Moreno, J.L. Who shall survive? (revised), 1953, pp. 440~450.
- (4) Nehevaissa, J. A sociometrist remarks on Soviet Purges. *Sociometry*, 1955, 18, p. 215~225.
- (5) Moreno, J.L. Sociometry, experimental method and the science of society. 1951, pp. 127~133

(三) ソシオメトリの科学的方法論

ソシオメトリの方法論は、モレノの哲学や彼の社会に関する諸概念と切り離しては考えることの出来ない重要な原理であって、彼のソシオメトリ体系の中で最も顕著な特色の一つとなっている。普通一般にソシオメトリの方法というと、ソシオメトリック・テスト、ソシオグラム、役割テスト、心理劇、社会劇など、いわゆる調査や治療の諸技術が意味され、それらの諸技術が恰もソシオメトリ的方法の本質であるかの如く解されている。確かに、モレノによって考案された諸技術は非常に目新しく且つ巧に構成されているので、多くの学者の注目を引き、おのおのが様々な調査に広く利用され、ソシオメトリ的方法としてもはやされてきた。しかし、その利用のされ方をみると、必ずしもモレノにとって満足のゆく利用のされ方ではなかった。というのは、モレノにおいては、これらの諸技術は相互に関連性をもった一連の技術体系の中の部分を成しているもので、決してその一つだけが独立的に使用さるべき性質のものではなかった。モレノのソシオメトリ的方法の本質は、寧ろ、それら諸技術が案出されるための源泉となり、それらの諸技術を体系的に関連させる接着剤となっている彼の行動的科學理論であって、単なる技術そのものではなかった。ソシオメトリ的諸技術がソシオメトリ的方法の本質であるかの如く誤解されたり、それらの諸技術が個々ばらばらに誤用されたりしているのは、いわば

彼の行動的科学理論への無関心に帰因しているのである。

ではモレノの行動的科学理論とはどんなものであったろうか。これまでも繰返し述べてきた如く、モレノのソシオメトリーは理想社会建設のための指導原理として考案された一つの実践科学であり、理想社会の実現にとって欠くことのできぬ二つの基礎条件、すなわち、社会の中核構造の測定と被調査者の自発性の喚起とを可能ならしめるための新しい方法論である。モレノによれば、従来の科学の発達の方角には、天文学、地質学、生物分類学などのように観察を主たる手段とする観察科学と、化学、物理学、実験生物学のように実験を主たる手段とする実験科学との二つがみられる。しかし、人間行動の科学としてのソシオメトリーはこのいずれの科学にも属するものでなく、また、これらの科学がもつ手続への追従に満足してしまうものではない。それは真に価値ある人間行動の科学となるために、また前述のようなソシオメトリーの目的を達成するために、新しいもう一つの科学的手続を必要とする。この手続が、人民のための、人民による、人民の実験計画、すなわち、自主的 (autonomous) 且つ自主測定的 (autometric) 実験計画である。⁽¹⁾

この実験計画の基本的特長は自発性高揚の過程 (warming up process) という点に見出せる。自発性に基いて形成される社会の内的中核構造を測定し、それに関連する様々な社会法則を発見していこうとするソシオメトリーにあつては、何よりも先ず被調査者の自発性をいかに高揚してやるかが重要な問題であつた。自発性が喚起されない限り社会の基礎的構造は発見し得ず、社会の真実の姿も真実の動きも到底理解し得ない。このような理由によつて、ソシオメトリーの方法や実験計画の特長をなす様々な思想はすべてこの自発性の高揚という線に沿つて考えられてくる。

先ず、人々は単なる有機体 (organism) としてでなく、動機付けが充分に喚起されている現実的状况においてともに共通の目標に向って積極的に行動している行為者 (actor) として扱われる。従来、人間行動の研究の領域において、実験または調査と呼ばれてきたもののほとんどは自然科学的実験方法の猿真似で、調査の対象となる人々はいつも受身の立場に置かれていた。実験の主導権は一方的に実験者の側に置かれ、被調査者は丁度物理学における水や火や鉱石等の物質と同じように、実験者の単なる操作の材料としての意味しかもたなかった。彼等は論理的推論によって精巧に組立てられた人工の実験状況の中にいやおうなく押込められ、被観察物として実験者の意のままに操作された。しかし、このような状況では自発性高揚の過程は全く歪められてしまい、実験者は実験し測定しようとするものを実は実験し測定していなかった。ソシオメトリの方法はかような欠陥を改めるために二つの点を強調した。その一つは、現実場面における行為者 (actor in situ) の研究である。"in situ" とは人々が実際に生活し働いている現実場面を意味する概念であって、実験的、調査的、治療的場面を意味するものではない。⁽²⁾ それは人々が経験的に最も豊富な知識をもっている場面であり、人々の自発性が最もよく発揮される場面である。ソシオメトリはこのような具体的生活の場面で、現実的問題に立ち向って行為している人々を対象に研究を進めていくことを本旨とする。この点、これまでの人間行動に関する実験、特にレヴィン一派の「集団力学的実験」とは全く対照的なものであった。レヴィンの実験は、どちらかといえば、物理学的概念にきわめて似通った概念化とそれに基づき厳密に組立てられた実験状況の設定とを特長としているが、モレノにいわせれば、このような実験はただ論理的優雅さを追って、それに適合させるようになってなんとかかかんとかでっちあげた実験 (contrived experiment) であり、分析的な準備段階が足りぬため、実験者自身その限界に気づかずにいるような

計画不十分な実験 (ill-designed experiment) である。⁽³⁾ 元来、実験状況というものは、広い意味で、(a) 物質的な面(対象側の面)、すなわち、実験が計画される物質(対象)、(b) 論理実験的手続の面、すなわち、仮説や普遍法則の妥当性を検証するために構成される方法、(c) 実験の材料(対象)と論理実験的手続の関係、との三つの相から構成されている。レヴィンの実験は、この中の論理実験的手続の精巧さにのみ気を奪われて、対象の面や対象と実験手続の関係の面を軽視してしまったところに欠陥がある。科学がまだ若い時代には、対象や方法に關するもっと要素的な知識が必要なのであって、実験方法の論理的な組立ての優雅さなどはさほど必要でない。⁽⁴⁾ かくてモレノは、人間の自発性を完全に喪失してしまう表向きの優雅さを捨てて、もっと素朴に、現実の生活場面で現実に行爲する人々の研究を重視した。言いかえるならば、従来比較的軽視されてきた対象それ自体の問題ならびに対象と方法との関係の問題に鋭く目を向けたのである。⁽⁵⁾

しかし、このように操作的な実験状況を全く否定し、その場その場の具体的問題を追ってゆくソシオメトリの方法から、果して普遍的な社会法則が発見しうるかという疑問が誰しもものに湧いてくる。この難問に対し、モレノは至極簡単に割り切った態度をとっている。彼によれば、現在あわてて普遍法則を求める事は危険なことである。それは科学のヴェールを着けた偽りの実験を導き、真理の装を凝らした誤れる結論を産み出すのがせきのやまである。われわれは、実験集団を綿密に構成し、これを統制集団と対比させるような実験に頼って性急に仮説を検証する前に、もっと十分な時間を現実状況内での人間行動の分析とその知識の集積にあてがわねばならない。つまり、今日の研究者はいまだその研究に「検証的方法 (method of proof)」を採用するよりも寧ろ「発見的方法 (method of discovery)」を採用すべき段階にあるのである。既に高度の発達を遂げてきた自然科学に

においても、勿論、初期の頃には発見的方法が採用されており、その方法によって集積された知識のうえに立って、はじめて検証的方法が効力をもったのである。以上のように説いてモレノは、ソシオメトリの功績は人間関係ならびに集団関係の領域における発見的方法の採用にあるとして、寧ろ発見的方法の意義を強調している。またときには更に徹底して、「ときの進むにつれて、いかに多くの事柄が知れようとも、また人間社会の或る部分のソシオメトリ的知識がいかに正確になろうとも、一つの部分から他の部分へ機械的に結論が普遍されることはできないし、同一集団についてもまた或る時点から他の時点へ機械的に結論を普遍することはできないということ忘れてはいけぬ。人間社会の各部分はつねにそれぞれが具体的に考えられねばならない」⁽⁶⁾とか、「ソシオメトリは（地理学や地質学と同じように）分類学的なものであり、その普遍化はかかる分類に基いてなされ得るのである」⁽⁷⁾と高度の普遍化を頭から否定してしまっている。

さて、モレノが従来の論理一辺倒の実験計画に対する修正として第二に強調した点は、調査ならびに治療の対象者であるすべての人々が単なる受身的立場を捨てて、調査、治療の目的に対する積極的な参加者となることである。逆に調査者や治療担当者がこれまでの傍観者の立場を捨てて、被調査者や治療者をもつ欲求の充足や関心事の解決に対するよき助力者となることである。すなわち、調査者も被調査者も、治療担当者も患者も、矯正官も非行者もともにこれまでの地位を捨てて、同一の生活場面における「共同行為者 (co-actor)」、共同対象者 (co-subject)、共同科学者 (co-scientist)」⁽⁸⁾となり、すべてのものが自分達の社会をより良き社会とするための実験に自から進んで貢献するよう努力することが必要とされる。人々をかかる状態に導き、深層から最大限の自発性を発揮させることをなによりも重要な目的として考案されたのがこれから先に述べようとするソシオメトリの諸

第二図 ソシオメトリーの諸技術

ソシオメトリーの諸技術	集団技術	ソシオメトリック・テスト; 知己テスト; ソシオメトリー質問調査; ソシオメトリー知 覚テスト.
	行為技術	自発性テスト; 役割演戯テスト; 状況テスト; 心理劇; 社会劇; 独白.

第三図 ソシオメトリーの諸技術

ソシオメトリーの諸技術	診断的測定的性格を帯びた技術	知己テスト; ソシオメトリック・テスト; 自発性テス ト; 相互作用テスト(あるいは、状況テスト); 役割演 戯テスト等.
	治療的政策的性格を帯びた技術	社会的割振り; 社会劇; 心理劇; 自発性訓練; 集 団精神治療.

があげられるだろうか。

近年モレノはソシオメトリーの諸技術を、集団を対象とするか個人^{フクシヨウ}の行為^{フクシヨウ}を対象とするかの違いによって、第二図の如く、集団技術(group techniques)と行為技術^{フクシヨウ}(action techniques)とに分類しているが、⁽¹⁾さらに立場をかえて、これを違った観点から分類することも可能である。モレノはかつてソシオメトリーの具体的研究法を、その目的によって、(1) 集団組織の研究を目的とする調査的方法、(2) 集団内における個人の地位及びコミュニティー内における集団の地位を分類することを目的とした診断的方法、(3) 集団ならびに個人のよりよき適応を助ける治療的政策的方法、(4) これらのすべての方法を巧に統合し、それを一つの操作にまとめあげ、且つ、その中のどれもが相互に依存するように組立てられた研究方法、すなわち完全なるソシオメトリーの方法の四種に分類している。⁽²⁾この分類からヒントを得て、その技術が診断や測定的性格を帯びたものであるか、あるいは、治療や政策的性格を帯びたものであるかによって、第三図に示すような分類が可能となる。勿論、先にも繰返し述べた如く、これらの諸技術は個々ばらばらに使用されるものでなく、そ

の目的に応じて、適宜に組合されて使用されなければならないものである。またその性質からして測定や診断的技術の後には必ず治療や政策的技術がともなうて来なければならない。⁽³⁾

(1) Moreno, J.L. Sociometric school and the science of man. *Sociometry*, 1955, 18, p. 23.

(2) Moreno, J.L. Sociometry in relation to other sciences. *Sociometry*, 1937, 1, p. 211, also, *Sociometry, experimental method and the science of society*. 1951, p. 21.

(3) 既に制限紙数に達してしまったため、今回は個々の諸技術について詳しく説明を加える余裕がない。次回の「ソシオメトリー」研究の発展と今日の諸問題(其の二)」においてこの説明に触れたいと思う。